

打ち込んできた思いはどこかでつながる

神戸大学 経済経営研究所
教授 伊藤 宗彦

本年度の正月も自宅で過ごしたが、楽しみの一つにスポーツ観戦がある。ラグビー、サッカー、駅伝、そして、アメリカンフットボール（アメフト）である。中でも、毎年、正月3日に行われるライスボウルは楽しみの一つである。1947年から1983年までは、関東と関西の大学のオールスター戦であったが、1984年より、甲子園ボウルで勝った学生日本一と東京スーパーボウルで勝った社会人リーグ（Xリーグ）の優勝チームが対戦する。社会人と学生による第1回のライスボウルは1984年に京都大学ギャングスターズとレナウン・ローバーズが対戦し、京都大学が日本一になっている。

本コラムは、その京都大学を2019年度の関西アメリカンフットボールのリーグ戦で破った神戸大学レイブンズの話を取り上げたい。2019年度の神戸大学レイブンズは大健闘であった。近年、二部落ちという屈辱を味わったが、その後、力をつけ、初めて甲子園ボウル出場権をかけたトーナメントへの出場を果たした。このように書くと、トーナメントの出場は容易であるように見えるが、その道のり、またトーナメントを勝ち抜き甲子園ボウル出場権を握るのには、並大抵の努力ではかなわない。概要を説明すると、甲子園ボウル出場のトーナメントは、西日本地区では、関西リーグの上位3校、そして、東海リーグ、北陸リーグ、中・四国リーグ、九州リーグの優勝チームによって争われる。2019年度の神戸大学は、快進撃であった。関西学院、立命館、関西、京都大学の4校は、選手層も厚く、毎年、必ず上位に来る。本年度も、この4校の壁は簡単には破れないと思われたが、立命館には完敗であったが、関西、京都大学には、見事勝利し、学生チャンピオンとなった関西学院には、あわやというところまで追いつめた惜敗であった。これは、大健闘で、特に関西大学に勝ったこと自体、奇跡に近かった。関西大学は附属高校も強豪であり、ほとんどの選手はスポーツ推薦で入学するアスリート揃いである。今年の神戸大学の躍進の要因の一つは、チームの司令塔、クォーターバックの活躍であろう。実は、実名は控えるが、このクォーターバックの選手は、私の高校のアメフト部の後輩であり、わざわざ名古屋からフットボールをするために神戸大学を志願したという強者である。

実は、この話には、さらに関連する話がある。私の母校、名古屋大学は東海リーグの強豪校であり、昨年の東海リーグを制していた。その司令塔、クォーターバックは、神戸大学付属高校出身であり、父親は、工学部の教授であった。2019年のシーズンの始め、本年度は、ひそかに、甲子園ボウル出場をかけたトーナメントで、神戸大学と名古屋大学の対戦がみられるのかとひそかに期待していた（正直なところ、確率は10%以下とは思ってい

た)。ところが、リーグ戦が始まると、神戸大学の快進撃が始まった。名古屋大学も、優勝候補の中京大学に競り勝ち、トーナメントでの対戦が俄然、現実味を帯びてきた。しかし、現実には甘くなかった。結局、名古屋大学は、やはり強豪の名城大学に惜敗し、東海リーグの優勝を逃してしまったが、神戸大学はリーグ3位に入り、見事に甲子園ボウルのトーナメントへの出場権を得た。トーナメントでは、神戸大学と中京大学がトーナメントの順々決勝で対戦したが、神戸大学は前半、中京大学にリードを許したが、後半、立て直し、辛勝した。中京大学に勝った名古屋大学が神戸大学と対戦していたら・・・と思うと、自分にとって、母校同士の対戦という夢の対戦の観戦チャンスを逃してしまった悔しさが、今も残っている。結局、神戸大学は準決勝で関西学院大学に敗れ、甲子園ボウルへの出場はかなわなかった。

今年は、ラグビーの世界カップに沸いたが、学生のアメフト界でも様々なことがあった。関西学院大学ギャングスターズの監督を40年続けた鳥内氏、マスコミをにぎわす大きな事件となった日大フェニックスの新監督の橋爪氏、いずれも、昔、試合をしたことがある知り合いである。両名には今後もぜひ、活躍してもらいたい。青春を傾けて打ち込んできたからこそ、いろいろなつながりがあり、時として、予期しない形で記憶を呼び起こしてくれる。本年度の正月のスポーツ観戦も、ひとしお、灌漑深いものであった。